昭和25年３月14日　第三種郵便物承認　令和３年10月１日発行（毎月１回１日発行）通巻866号

禅の友

—Zen no Tomo—

10

October 2021

ご本山だより

大本山永平寺【福田衣】

僧侶が着る衣に、「お袈裟」がございます。お袈裟の種類は様々で、日常掛ける「五条衣」、坐禅や法要の際に掛ける「七条衣」、法要の導師を勤める際などに掛ける「九条衣」などがございます。これらのお袈裟は縦の布と横の布が規則正しく配列されており、古い町並みで「碁盤の目」と表現されるものは、実はお袈裟がもとになっている、ともいわれます。

またお袈裟は別名「福田衣」とも呼ばれますが、お釈迦さまご在世の頃、仏教の僧侶と一目で分かるよう「水田」を題材に考えられたと伝えられております。

『大乗本生心地観経無垢性品偈法衣十勝利』には「道の芽の増長することは春の苗の如く、菩提の妙果は秋の実に類たり」と説かれております。

お袈裟「福田衣」を身に着けた修行僧は、まるで春に芽吹く大自然の姿の如くに仏の道を修行し、そしてまた、秋になると水田に沢山のお米が実るが如く、修行僧たちには「ほとけ心」が実るのです。

道元禅師さまもこのお袈裟をとても大切にされました。永平寺では毎朝の坐禅の後、修行僧たちがそれぞれお袈裟を身に着けます。その際には必ずお袈裟を頭上にいただき、両手を合わせ合掌し、お袈裟を掛ける際の偈文をお唱えいたします。お袈裟はお釈迦さまから伝わった正しい教えそのものでございます。

実りの秋は精進辦道の好時節、今日も永平寺の修行僧はお袈裟を掛け、仏の正しい教えを修行いたしております。

大哉解脱服（大いなる哉　解脱の服）
無相福田衣（無相の福田衣）
被奉如来教（如来の教えを被奉して）
広度諸衆生（広く諸の衆生を度したもう）

大本山永平寺
☎〇七七六・六三・三一〇二

ご本山だより
大本山總持寺

【法堂上見挿鍬人
法堂上に鍬を挿む人を見る『洞谷記』】

大本山總持寺
☎〇四五・五八一・六〇二一

向唐門前のブロンズ像
（中央・瑩山禅師、右・峨山禅師、左・明峰禅師）

両大本山では開山忌のことを「御征忌」と申します。つまり開山瑩山禅師、二祖峨山禅師（お二方を御両尊と申します）をお慕いしての法要であります。この「御征忌」には焼香師さまが禅師さまの代理として法要の導師を勤められ、報恩の誠が捧げられます。

今年總持寺では十月十一日より十七日まで行われますが、四月に予定しておりました報恩大授戒会が感染症拡大のため延期されたことで併せて厳修されることになりました。

本来なら全国から募集した戒弟さんたちが七日間の加行を修し、お釈迦さまから脈脈と受け継がれてきた尊い戒法を戒師さまである禅師さまより授かります。戒法を授かることは仏道を全身全霊で生きようとする証でもあるのです。

今回はコロナ禍の影響で大幅に縮小せざるを得ないことになります。

また十月より冬安居制中に入り、首座和尚を中心に一〇〇日間の修行期間も始まります。

標題は瑩山禅師遺偈の最後の七字です。

遺偈とは一般に「辞世の句」と呼ばれます。禅僧の世界では自身の境涯、弟子に対しての教えや誡めを示すものです。

正中二（一三二五）年八月十五日瑩山禅師は遺偈を述べられ、大いなる生涯を閉じられました。自らの命が尽きるまで田に鍬を入れ種を蒔き、稲を育てることは自らの教えを多くの弟子たちに伝え、護り続けていくことであって、それは法堂を中心として日々の修行に励む修行僧に対して厳しくも慈愛に満ちたお心で綴られた最後の言葉なのであります。

曹洞 俳壇

選・坊城俊樹

広重の絵の夕立も斜めかな

東京都　長谷川　瞳

評　かの有名な歌川広重の「大はしあたけの夕立」という絵のことだろう。傘さす人たちが、足早に日本橋を渡っている。ゴッホもこれを模写したとか。その斜めの線のような雨が印象的。眼前に降る雨もまたそんな風情であるという。洒落た比喩を用いた。

大放水黒部に果てし人へ虹

山口県　粟屋　邦夫

評　「黒部の太陽」という映画を思い出す。建設に巨大な費用と人の命を掛けた壮大な話であった。実際に多くの犠牲者を出したことでも有名。今またそのダムの大放水を眼前に見ている。そこにきれいな虹が架かった。亡くなった人たちへの鎮魂の虹なのである。

◆草むしり浄土の人と語りつつ　宮城県　髙橋　靜子

◆秋風の入口出口無人駅　青森県　中田　瑞穂

◆切れ長の伏し目涼しき六地蔵　北海道　大野　節子

◆鼻高くなれ一筋の天瓜粉　山口県　御江　恭子

◆大花火ねころんでみる浴びてみる　静岡県　東学　克江

◆先を行く我が濃き影や夏木立　島根県　今岡　式枝

◆遠花火闇の余白へ音を消し　大阪府　柏原　才子

◆盆飾り自分の好きな菓子ばかり　山口県　稲村　みどり

◆一天と一水の間や秋の蝶　宮城県　阿部　澄江

◆思ひ出が思ひ出連れて天瓜粉　青森県　髙橋　敬子

選者吟

喧嘩して赤い傘干し虹を待つ

俊　樹

作句小見　若い二人は喧嘩をしてしまい、彼女はアパートに帰ってきた。外廊下にその赤い傘を干して物思いにふける。もうすぐ雨が上がりそうなのに沈んだ気持ち。でもきっと彼方にはきれいな虹が架かるのだろう。そんな風景を物語のように作ったフィクションの句。

曹洞 歌壇

選・長澤 ちづ

大津波をとどめし土手の上に咲く額あぢさゐは海の色なす

岩手県　阿部 凞子

評　初句の大津波は、十年前の東日本大震災の大津波のことだろう。あの大津波をとどめた土手の力に圧倒される。其処に咲く額紫陽花の色を津波を起こす海の色に喩えた。あの時の津波は映像では黒く不気味であったのを思いだした。

釣り上げたオイカワくるくる糸に舞ひ夏の川面に虹を架けたり

三重県　西村 廣親

評　「オイカワ」は淡水魚の名で「追河」と書く。旧仮名では「おひかは」。魚と分かりにくいので片仮名表記にした。一首は絵画的で美しくまた躍動感に溢れる。

◆育てきし蔬菜を食しその味覚肥料加減を噛みつつ思う
岩手県　宍戸 さとる

◆小心に穴を出入りする磯蟹は己の影におびえる如く
鳥取県　徳本 義則

◆ガタゴトの列車の隅でわが夢を抱き締めていた十八の時
秋田県　小松 紀子

◆幾度もの地震に生き来し古時計軽き地震に命尽きたり
福島県　大槻 弘

◆百一つの姉は如何と来て見れば新茶用意し待ち居てくれる
福島県　西木 甚

◆草を取る合間に父と競ひたり百メートル参道杏（とほ）き日のこと
千葉県　植草 豊子

◆「ぢいさん」と話しかけくるこの人はわれより九歳上のぢいさん
福岡県　三吉 誠

◆山桃の赤紫に熟れたる実を子ら競ひ合ひ次々と採る
三重県　藤川 幸子

◆あさなさな垣の朝顔咲き揃ひ道行く子らの数へる声す
鳥取県　眞山 博充

◆堰堤の水は田毎に満たされて空の夕映え置かぬ田はなし
岩手県　関合 新一

選者詠

一片も秘密めくことあらぬ日々くちなしの香に面うずめみる

ちづ

作歌小見　今月は応募歌も多かったが秀歌も多く十二首にしぼるのがとても難しく迷いました。野菜作りに真摯に向き合う宍戸さん、余裕ある三吉さんの歌にはユーモア精神が横溢、軽快な調べに惹きつけられる。関合さんの機知に溢れる表現も良い。

ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々に住所（都道府県名から）・氏名を楷書ではっきりと記入し送付先までお送りください。